

○青木千賀子\* 渡辺聰子\*\* (\*日本大短大, \*\*日本女大(非))

【目的】「装いは自己表現」と題して、高齢者・障害者のファッションフォーラムが、昨年11月に東京で開かれた。(主催：障害者・高齢者衣服研究交流会)ここでは、障害を持っている人、障害・高齢者を介護している人、オーダーウェアを製作している人、リフォームサービスに携わっている人、企業の研究所に所属している人など、それぞれの立場から衣服に関する様々な意見や問題点が提起された。この中で特に、声を一つにして強く訴えられたことは、「ノーマライゼーション」または、「バリアフリー」の精神であった。既製服が、着る人のニーズに合わせてサイズや色、デザイン、素材において多様化している今日、高齢者や障害者衣服も特別枠とせず同じように、検討されるべきということである。「共に助け合いながら生きる」という意識の改革こそ、今最も必要とされているようである。本研究では、高齢者・障害者の衣服を通じて、これらをどのように具体的に推進し、実践していくか探ることを目的として検討を行った。

【方法】高齢者や障害者の衣服については、様々な分野で研究されているが、それらの参考文献や資料、上記フォーラム、また福祉系専門学校生37名、短期大学生35名のレポートから高齢者・障害者に対する意識、衣服のあり方について考察を行った。

【結果】機能的で快適な着衣は、生活する上で基本的に重要であるが、これに「装い」が加わると人との交流を積極的にし、社会参加への糸口ともなる。高齢者・障害者の生活を精神面と実際面の両面から、より豊かにするために衣服においてもノーマライゼーションの考えは重要である。リフォームサービスをネットワーク化し、家庭や学校、職場、また地域社会の中でこの問題を取り上げ、共生の意識を高め考えることが、必要であると思われる。学生はそのことを漠然とながら真摯に受け止めているようである。